

『オルテガ』

渡邊 修 著

『大衆の反逆』を世に問うて二十世紀初頭のヨーロッパ及び世界の思想界に衝撃を与えたスペインの哲学者、ホセ・オルテガ・イ・ガセツ（一八八三—一九五五年）の生涯と思想を解明した教養書。清水書院の企画「人と思想」シリーズの一つだが、同シリーズの刊行目的にも明らかのように、この世界的大思想家について、当時の社会的背景に触れながら理解を深めようと試みた一般及び学生向けの入門書である。

オルテガは十九世紀末から二十世紀にかけての混乱の中で、ヨーロッパ文明の将来を憂え、政治的、社会的危機の根源が大衆の反逆にあると主張した。彼の言う「大衆」とは、経済的・階級的意味での大衆ではなく、知的・精神的に優れた人間に対する凡俗な平均人を意味し、彼らが過度の平等と民主主義を要求するあまり社会秩序が乱れ、やがては全体主義の危険をもたらすのではないかと憂慮した。『大衆の反逆』が出版されたのは一九三〇年。オルテガの予言通りに、イタリアではファシストのムッソリーニがすでに政権をとっていたし、三年後にはドイツでヒトラーがナチ政権を誕生させ、さらに六年後に母国スペインでフランコ將軍の独裁政権が誕生、フランキスモ体制がその後延々三十五年続くのである。

オルテガは本来政治学者でも社会学者でもなく、純粹な哲学者であ

る。スペインの高名な哲学者ウナムノの弟子として早くから認められ、マドリッド大学で哲学博士号を取得し、その後ドイツに留学、新カント派のH・コーエン教授に私淑する。後に独自の生哲学「生の理性」理論を生み出し、「私は私と私の環境」という有名な命題と独特な「遠近法」思考方式によって、カント、ヘーゲル、フイフイテ、ヴィンデルバントなどに連なるドイツ中心の「文化哲学」批判を試みる。『哲学の起源』、『哲学とは何か』、『現代の課題』その他数多くの著書、論文や講義録でその論旨が展開される。しかし難解な哲学理論はさておき、オルテガ独自の社会思想、文明論の軸は、『大衆の反逆』はもとより処女作『ドン・キホーテに関する省察』をはじめ「無脊椎のスペイン」、『危機の図式』、『体系としての歴史』、『世界史の一解釈』などの労作に明快に記される。筆者（渡邊）は特にこれら文明論や歴史観の紹介に力点を置き、ヨーロッパ文明の中のスペインの歴史的地位、ラテン、ゲルマン、イスラム文化が交錯する特異な環境説明にもスポットをあてることを試みた。

オルテガ母方の実家は『エル・インパルシアル紙』を経営していた家系であり、父親も著名な文筆家だった。こうした「輪転機の下に生れた」宿命を最大限に生かし、自らの執筆活動や後年の新聞経営、雑誌『西欧評論』の発行等々を通じて、ジャーナリストとしての仕事にも打ち込んだ。スペインの近代化、合理化を唱えて政治家となり、改革を志すが第一次、二次両大戦間の複雑な国際環境、国内情勢の中で挫折する。スペイン内戦以降フランコ批判が高じて、妻子ともども南米に亡命せざるをえなくなる。戦後帰国したがフランコ体制が定着し

ていたため十分な活躍は出来ず、病魔にも侵されて、安住出来ないまま七十二歳でこの世を去った。文字通り波乱万丈の生涯でもあった。

しかし冒頭に述べた『大衆の反逆』ほど諸外国に大きな影響を与えた書は少ないだろう。発行直後スペイン国内はもとより、ドイツでもベストセラーとなった。今日なお英、独、仏語をはじめ日本語にも翻訳され出版されている永遠のロングセラーと言える。「大衆とは自分がみんなと同じ」だと感じることを一向に苦とせず、それどころかむしろ自分が他人と同じだということに喜びを感じる人々すべてである。「現代の特徴は、凡俗な人間が自ら凡俗であることを知りながら、大胆にも凡俗であることの権利を主張し、あらゆる所でそれを押し通そうとするところにある：」「ごく近年の政治的革新とはこれら大衆が政治的支配権を握るようになったことだと思う：」「俗物が社会を支配し政治を支配するようになったら、どうなるのか？ 真の意味での個人主義はすたれ、民主主義がファシズムになる危険が目に見えている、とオルテガは懸命に警告した。この議論は今日の日本の政治不信、社会のあらゆる分野にわたる権威の喪失、悪平等主義の蔓延にも通じるのではあるまいか？ 筆者がこの小著を書く最大の動機になったのはまさにこの点だった。

だがオルテガの大衆社会論は一種の衆愚主義であり、鼻持ちならぬ貴族趣味、エリート主義だと反撥する人は少なくない。フランコ將軍の独裁体制の理論的支えになったとする解釈もある。しかし彼自身はフランコの宿敵であったわけだし、主張の原点はあくまでも全体主義への対決にあった。社会主義国家として成立間もないソ連について、

スターリン体制を極度に批判、その野蛮性を指摘しながら体制の崩壊を予言したり、アメリカの超民主主義的傾向にペシミスティックな見方をとるなど、オルテガの時代感覚や将来展望は抜群であった。一哲学者として以上に、研ぎ澄まされた嗅覚と分析力を備えていた真のジャーナリストだったとも言えよう。近代ヨーロッパの形成にあたって、フランスと、ドイツを軸とする「二裂葉構造」を明確にし、近未来のヨーロッパ統合の必然性を見抜いていたこと、さらに世界情勢の中で中国やイスラム勢力の台頭を予測したこと（『無脊椎のスペイン』）なども、今日の世界の視点にたつて考えると、ただ炯眼としか言いようがない。欧州連合（EU）はすでに一九九九年一月から共通通貨導入の段階を迎えており、フランス、ドイツがその中核的存在になっていることは周知の事実であるし、一方で中国の新しい国作りが改革・開放の名の下に進展の兆しを見せていること、さらにはイスラム勢力が原理主義運動の脅威を日毎に高めつつあるからである。

オルテガ研究書は欧米には数多く出版されているが、日本でも著作集八巻（白水社）をはじめ数種の単行本、研究書が出版されている。しかしこれらと比べて本書の特徴は、すでに述べたようにオルテガ哲学の理論解説よりも、彼のユニークな世界文明論、ヨーロッパ文化論、スペイン論の紹介に重点を置いた点であろう。

渡邊 修著『オルテガ』

清水書院刊（一九九六年八月）

A 6 判 二一六頁

七〇〇円